研究ノート

持続可能性の概念と英米文学研究のインターフェイス
―サステナビリティ学のための文学批評への一考察―

松　岡　信　哉

The sustainability path in Anglo-American literature: An essay on literary criticism in sustainability science

要　旨

本論は、持続可能な社会、あるいは人間社会と自然の持続可能な関係の樹立のため、種々の学問領域からの知見を統合しようとするサステナビリティ学における、英米文学研究の独自の位置を模索しようとする試みである。筆者の見解では、この新しい学際的学問領域において、英米文学研究は少なからぬ貢献をなしうるはずである。本論ではこれまでの文学研究において開拓されてきた主題に即し、このことを明らかにしようとした。

キーワード
持続可能性，サステナビリティ学，英米文学研究，持続発展教育（ESD）

ABSTRACT

In this paper, I situate literary criticism, especially of Anglo-American literature, within sustainability science, which integrates scholarly disciplines in order to establish a sustainable society or a sustainable relation between the human and natural realms. In my opinion, literature provides good materials for this relatively new research area. I make a few suggestions on the incorporation of literary studies into it.

Keyword
sustainability, sustainability science, literary criticism, Education for Sustainable Development (ESD)

I　はじめに――人文科学にとってサステナビリティとは何を意味するか？

自然科学や社会科学などの学問の世界においてサステナビリティ・サイエンスという言葉が流布して久しいが、言うまでもなくこの言葉の背後にあるのは、地球環境が危機的な状況にあるという認識である。純粋に理論的な観点から事象に関する真実を探求するサイエンスとは違って、サステナビリティという語を冠したサイエンスであるサステナビリティ・サイエンスは、社会と世界のあるべき姿の追求という理念や目的をビルトインされたサイエンスである。人間社会と自然の持続可能な関係、あるいは地球環境の持続可能性の構築がサステナビリティ・サイエンスの主要目的である。[1] 近代文明がある規模のスケールにまで到達し、それが無尽蔵のリソースと見なされていた自然環境を（マイナ

スの方向に）改変する力をもつようになるまでは、自然や地球環境の持続可能性とは自明のものであり、当たり前に存在するものであった。柄谷行人が指摘するように、神によって合目的的に構築された世界の摂理を明らかにすることが旧来のサイエンスの目的であったとするならば、持続可能な社会の構築のためにサイエンスを活用し、人間と自然の関係を能動的に調整しようとするサステナビリティ・サイエンスとは、ある意味では人間が神にとってかわった現代特有のサイエンスのありようだと言えるかも知れない。ともあれ、現代における学問研究は何らかの仕方で、喫緊の環境問題に対する処方を提示しなければならないという認識がすでに一定程度共有されていると言えよう。そしてこの目的を達成するために、種々の学問領域に携わる研究者は、自らの専門領域の知見を他分野の知見と融合させ、持続可能な社会の構築のため、諸課題の解決などに役立てなければならない。サステナビリティ・サイエンスという概念の背景には、このような考え方がある。その特徴は要約すれば目的論的配置と学際性であり、以下のような基本テーゼにまとめることができる。

1) 初期設定された目的に合致するように学問的な探求の方法やロジスティックスが配置されていること。
2) 1)における初期設定された目的の達成のために、必要とされる領野の学問研究が選定されるべきであり、その逆ではない。また同様に、目的達成のためには唯一の学問研究領域が排他的に指定される必要はまったくない。それどころか、あらゆる学問領域の知見の総合的利活用が考慮されるべきである。したがってサステナビリティ・サイエンスとは必然的に学際的・領域横断的なものとなる。

とりわけ上記1）は、サイエンスの方法論からすると大きな問題をはらむようにも見えるかも知れない。特定の思想や信条・信仰などによる世界理解に関わるバイアスから自由となり、ニュートラルな視点から物理的現象や意識現象を記述しようとするのがサイエンスだからである。世界の記述や解読がサイエンスの目的なのであり、そこで得られた知見が応用され、社会で役立つ技術などに転化されるのは原則的には二次的なことであるはずだ。しかしながら外的機関の補助金などを得て実施される産学共同事業の例などにも見られるように、特に自然科学系分野においてはその研究成果がいかにわれわれの社会を利するか（または事業収入を生み出しうるか）という観点は研究計画を立てる際にはむしろドミナントであって、それ以外の研究は基礎研究などという言い方でむしろマイノリティであるかのようなニュアンスで言及されるようにもなっている。その意味ではサイエンスとサステナビリティ・サイエンスとの間には大きな断絶はなく、むしろ連続性において理解される。

このような現象は自然科学・社会科学の分野で顕著であるが、事態は人文科学の分野でも同様である。一例として大学における人文科学系の教育研究の現況を見ると、近年、「国際」、「人間科学」、「環境」など学際的な内容のプログラムをもつ学部・学科が相次いで設立されている。これら新学部・学科の設立がたぶんに大学経営・行政上の理由から行われていることは否定しがたいが、これが従来の専門領域の壁を取り払った、上記2）とも関連する、新しい知の枠組みを求める動きであることも事実だろう。文学部や法学部など、もっぱらアーカイブ化された知の遺産を研究対象とし、その精読と内省的思考を主として要請する学問領域は近年人気低落気味であるが、このことは大衆化された大学において職業的関連性[2)]が高いと思われるスキルの獲得に学生のニーズが向かっていることと関係がある。学際的な知のありようの模索、また職業的関連性という大学教育における二つのトレンドの背景には、学問的知に有用性という価値を求める昨今の社会がある。人文知もまた自然科学、社会科学同様に有用（「役に立つ」）であることを求められる時、環境というテーマが前景化された。

環境とは人間と外的世界のインターフェイス、および両者の関係の総体を指す概念である。そして人文科学が人間的事象をその研究対象とす

ると言うことが妥当ならば、人文科学は環境の学だとも言える。それでは環境についての学でもある人文学は、社会の中でいかに実践的効用を持つ成果を作り出しうるだろうか。ここでカギとなるのは、環境はすでに人間の意識をその中に含む概念だということである。次のような事例を考えてみよう。例えば（小説でも何でもよいが）読書と内省によって環境に関わる人間の意識が変化したとする。このような個人の意識の変化はただちに生活実践の変化に結びつくことがある。個人レベルでの生活実践のこのような変化が（微々たるものかも知れないが）世界のありようをもまた変え得るという点において、人文学は社会に対する実践的効用を持つことになる。よい物語や書物はある人間の世界に対する見方を変え、そのことによって同時に世界・環境もまた変化している。これは人間と外的世界の関係ネットワークの総体という環境の定義の中に内包されていることの論理的帰結である。

ここにおいてサステナビリティ文学研究という領域の開拓が考えられうる。持続可能な社会の構築という価値を定着させることを目的とする文学研究、ないしは文学教育カリキュラム開発を通じて、文学研究はサステナビリティ学[3)]の一翼を担うことができると思う。文学作品を書くことによって作家は何を目指しているのだろうか？言語によって構築された作品を通して真善美を記述したり表現したりすることを目指している、と言うことができるかも知れない。しかしまた作家は、表現行為を通して誰かに語りかけており、メッセージの伝達を目指している。この意味で文学は、他者の意識に働きかけ、それを変容させることをその目的、あるいはその効果として含む学問領域であると言え、この人間の意識変容を主要目的とする学的探究という点において、他の自然科学、社会科学とは大きく異なっている。そして環境の（望ましい方向への）改変が環境概念の定義の本質からして、人間意識の変容を含むのだとするなら、環境を望ましい、あるべき姿にしていこうとするサステナビリティ学の重要な一翼を、文学を含む人文学が担いうるということにもなる。

持続可能な社会の構築のために人間の環境に対する意識を変えることが、人文学のサステナビリティ学への独自の貢献の形であるということを上に述べた。このことをより具体的に文学固有の領域にあてはめて考えてみよう。すなわち、文学研究はサステナビリティ学となるためにどのようなことをすればよいのか。一つには、文学作品に描かれた持続可能性の問題を検証し、これまで人間の歴史において現実化したり、想像されたりした、人間社会と外的社会の持続可能な関係の表象を摘出する、という作業が考えられる。人間の歴史の中で、特に時間軸の長さという観点からすれば、最も長大なアーカイブを持っているのは、Youtube や Facebook やさらにはインターネットですらなく、世界の図書館に収蔵された印刷物としてのテキストであろうし、このアーカイブを探索して持続可能性の表象についての系譜学的研究を行い、それをサステナビリティ学に援用することは文学だけができる貢献であろう。また人文知の社会的効用が読者の意識変容を実現することを通して、社会をもまた変容させることであるとすれば、当然のことながら人文学的知の教育への応用が重要である。文学テキストの中に描かれた人間社会と外的世界・自然の持続可能な関係性の表象を通時的に研究し、その後その研究成果を、持続可能な社会の構築という目的のために教育に応用することが、人文学のサステナビリティ学への貢献の主要な方法となるはずだと筆者は考えている。すでにこの分野においては、瀬名波を中心にいくつかの重要な試みがなされている。本論においては持続発展教育における文学作品の利用についての詳論には立ち入らないが、詳しくは瀬名波、松岡（2013）などを参照されたい。

Ⅱ　文学的想像力と持続可能性、あるいは持続可能な発展の概念との関係

本節ではまず持続可能な発展という概念について考えて見よう。持続可能な発展という概念は、70年代80年代を通してジェンダーや人種といった領域で問題となった社会的弱者への配慮やエンパワメントなど、いわゆる政治的に正しいふるまい（politically correctness）が、環

境や将来世代という新たなファクターへ拡張されたものとも考えることができる。女性やエスニック・マイノリティの社会的権利を保障するため、社会的抑圧を受ける当事者および彼ら/彼女らの権利を擁護する人々が声をあげ、権利獲得のための運動や環境整備を行ってきた。それまでの社会構造下では搾取と抑圧の対象であったこれらの人々を社会的に包摂し、一層の社会参加をうながすことが、社会を回していく上で必須と見なされるような認識・構造転換が社会に生じたことがこの背景にあると思われる。ところが人類の生産活動の規模が増すことによって、一個の有機的社会・世界を構成するメンバーとして、先進国と途上国が同じテーブルについて話し合うようになり、また自然環境をも（比喩的に）人間社会のコミュニティーの一員と見なす必要が出てきた。[4] ややアイロニカルに文学的な表現をとれば、自然環境もまた人間コミュニティの一員であり、いまや社会的弱者となったこのメンバーに対して政治的に正しくふるまい、本来の権利を保障せねばならない。そうしなければ地球というコミュニティ自体がうまく回っていかなくなることは目に見えている、というわけである。

地球温暖化の問題において見られるように、これまで利益追求のために環境リソースを利己的に利用し続けたことで、人類は自己の存立基盤たる地球環境を危機に瀕しせしめた。エネルギー資源など環境リソースの濫用がこのまま続けば、現在世代にとって脅威となる諸問題を生み出すのみならず、次世代にとっての生活環境がさらに深刻なレベルで劣悪化するだろう。近年地球環境危機の度合いが増したことで、現在世代は環境のカタストロフを遠い未来としてではなく、子供や孫世代に起こりうる出来事として、リアルに想像できるようになった。このこともあって、環境や将来世代といった、従来は政治的に正しいふるまいの及ぶべき射程の外にあったファクターが考慮対象に含まれるようになったのだ。動植物や無機物を含めた環境は人間の作る社会と運命共同体をなしている。また環境に関わる意思決定において、来たるべき将来世代の利害も考慮に入れなければならない、という認識が広く浸透するようになった。持続可能な発展の概念が「発展」という通時的な射程を含んでいることには、上記のような背景がある。阿部（生方秀紀他編 3 頁）によれば持続可能な発展の概念は当初、無限の成長を目標にするものと見なされ、批判を受けた。しかしながら上で述べたように、将来世代に社会や環境を持続可能な形で引き継いでゆくという視点が「発展」という時間軸に沿った展望を導入することを要請したのである。他者の生存権への配慮から持続可能な発展という考え方が出てきたのだとすれば、それが無限の成長を目指すがゆえに結局は自然環境を損なうのでは、という批判はあまりフェアなものだとは思えない。地球コミュニティの生存という課題を長い時間的スパンをとって考えた時に、経済成長のファクターを組み込むことが必須と見なされるようになった経緯があり、オルターナティブは少ないわけである。経済発展を否定することは、究極の意味では地球環境において人類の存在は害でしかないという原罪論の類の結論に至る可能性があり、それはそれで哲学的には意味のある話かも知れないが、社会的に有効な立場とは見なされえないだろう。しかしこの後見るように、文学研究のサステナビリティ学への応用の困難が、まさにここにある。

それでは、文学研究は持続可能な発展の問題とどのように関わるのか、という点に立ち返ろう。人類の文化において、言葉を用いて人間もしくは世界、およびその両者の関係を探求する文学・哲学的な思惟は、建築と並んで最も本質的な営みの一つであると言えよう。それゆえに文学もまた、それ固有の仕方で持続可能性をその思考の対象としてきたと考えられる。しかしながら、昨今のサステナビリティ・サイエンスが持続可能な発展を揺るぎない到達目標としているように見えるのと比べれば、文学が持続可能性の概念に対してとる関係は両義的であり、時に親和的であれば、時には非親和的である。すなわち、往々にして文学作品が経済成長や自然破壊を絶対的な悪として描き、究極的には文明の放棄の必要さえをも示唆する場合があることは、文学に親しんだ人間であればすぐにわか

ることである。先に述べたように、サステナビリティ学の基本前提として、持続可能な社会の構築という初期設定された目標があった。この初期設定された目標達成のためには持続可能な発展が必須であると見なされるようになった経緯を上に述べたが、文学がこの持続可能な発展を否定するのであれば、文学がサステナビリティ学に対して貢献する、という見込みはついえはしないだろうか？以下ではいくつかの文学的トレンドを例にとって、この疑問点を中心に考察してみたい。

Ⅲ　文学における持続可能性と持続不可能性

文学作品は時間を越えて持続するものへの憧憬を表現し続けてきている。邪悪さや醜悪さに満ちた人間の住む世界を超克しようとする精神は、ロマンティシズムの文学に見られるように自然の世界に永続する美と調和を見出した。自然は人間に対して時に厳しい表情を見せるが、自律的な自然の世界の美は、時に神の概念に等しいものとして認識されることがある。自然とは神と同じものであり、またこの自然＝神は人間精神と相互照射・協応しあうものと見なされる。エマソンのトランセンデンタリズムは自然と神の両者が深層で同一の存在であることをとくが、このような思想は自然に超越性を見出すタイプの思考を典型的かつ、論理的につきつめた形で表現するものである。要約すれば、文学的想像力は有限な人間と対比して、永続（持続）するものを偉大なものとして表象する。キリスト教文化圏においては無限なものとは神であるが、これと比較できるものを感覚的世界において求めれば、それは往々にして自然となる。したがって自然を神と同一視する思考がしばしば発生する。そしてまた文学的テキストにおいて、このような典型がいくつも見られる。

その一方で、文学作品は持続を断ち切るもの（持続不可能性）へも並々ならぬ関心を示している。例えば日常の持続を断ち切る戦争は文学作品に刺激的な主題を供給してきたし、特に第二次世界大戦後の冷戦下では、核の脅威、および核戦争によってもたらされる世界の終末のヴィジョンが、さまざまな形で文学的想像力に影を落としている。近年文学批評の分野で力を得つつあるエコクリティシズムは、ジョナサン・ベイトが指摘するように、冷戦が終了する1991年を一つのターニングポイントとして大きく発展した。冷戦が終了してすぐに、人類自身がもたらしうる人類の破滅は、超大国による核戦争によってではなく、現代のわれわれの日常活動が環境にもたらす汚染によって引き起こされる、という認識が生じたのである。[5] "Along with the possibility of the extinction of mankind by nuclear war, the central problem of our age has therefore become the contamination of man's total environment with such substances of incredible potential for harm..." (8) とのレイチェル・カーソンの『沈黙の春』における認識が、ついに人口に膾炙するようにいたったのである。人類の現代的な生活様式の持続が、地球環境の持続性を阻害するというジレンマが、課題として浮上してきたのだ。

『沈黙の春』の第一章で、カーソンは化学物質によって汚染され、春に小鳥の声が聞こえなくなったアメリカの中西部の農村を描く。この章の最後に著者が述べているように、沈黙の春が訪れたこの農村はあくまで著者が想像によって作り出したものである。著者は全米のあちこちの農村で萌芽的に起こっている環境被害を想像力によって総合し、ありうべきカタストロフィックな未来へと警鐘を鳴らしている。文学的想像力は環境汚染の行き着く先が、人類の未来の持続不可能性であることをイメージによって提示する。このカーソンの例に見られるように、エコクリティカルな文学、およびエコクリティシズムの批評は、持続不可能な世界のイメージの仮構作業を通して、持続可能な社会のありようを希求するメッセージを発信するという側面をもつことがある。

人間の愚かさが自己自身や自然環境を破壊する、というこのようなモチーフは、とりわけキリスト教文化圏の人々の想像力に訴えかけるようである。黙示録的な終末のヴィジョンは、原罪をもって生まれてきた人間が宿命論的に愚かな行動駆り立てられ、世界を破滅に導くさまを表象する。しかしながらこのようなタイプの想像力は、悪夢

的な終末を描くことにより警鐘を鳴らし、思い描いた未来が到来することを回避しようとする動機を秘めている。文学作品においてはむしろ量的には持続不可能性がより多く表現されているようにも思えるが、本論ではこれをあくまでも持続可能性の反転像と位置づけ、人類の文化の持続と幸福の実現を希求する精神が、その方策として反転像を提示したものと見なしたい。

Ⅳ 文学作品における持続可能性表象の個別例

それでは文学における持続可能性表象、およびその反転像としての持続不可能性表象の具体例を見てゆこう。

1) 東洋思想の世界観

上で見たように、文学における持続可能性と持続不可能性の問題は、もっぱら自然との関係において現れている。これに深く関連するのが、エコクリティカルな批評によってしばしばなされる、ユダヤ・キリスト教的な自然観が現在の環境危機を引き起こしているとの指摘である。このユダヤ・キリスト教的な自然観の根底にあるのは、人間はその意志の力と技術によって自然をコントロールすることができるという考え方である。このような信念に基づいて自然開発を進めた結果、文明は自然の再生力を損ないかねないところまで到達し、自然環境の持続可能性を危機に至らしめた。

ここで少し角度を変えて、このユダヤ・キリスト教文化と自然の対立関係を、時間の相から考察してみよう。キリスト教の歴史認識において、時間とは直線的に流れるものであり、世界の終末へと向かうその流れは不可逆的である。歴史の延長は、はじまりと終わりによって限定されており、神による救済が人類を永遠の地平へといざなうことがなければ有限である。他方、自然の世界における時間とは循環するものであり、四季のサイクルに見られるように、一つのサイクルの終わりは次のサイクルの始まりへと連続してゆく。つまり自然の時間を規定するものは持続性なのである。要約すれば、キリスト教的世界観において自然とは陶冶すべき対象であり、また自然のサイクル的な時間性は、キリスト教の直線的歴史観とは相いれない。

それでは西洋文化の主流をなすこのトレンド、およびこの世界観が示す自然との敵対的関係を、文学テキストはどのように（批判的に）取り扱ってきたのか、いくつか個別例を見てみよう。好例はアメリカのヒッピー・カルチャーの影響下に起こった文学運動である。人間と自然との協和的な関係を破たんせしめ、カタストロフ的な終幕へと導きかねないユダヤ・キリスト教的価値観に基づく近代文明に対して、50-60年代のアメリカのカウンターカルチャーはしばしば東洋的無常観や仏教思想を対置し、それらを賞揚したことはよく知られている。[6] 東洋的な思想に見られる無や空の概念は、世界がつねに生成変化するものだという認識を表すものだ。この不断の生成変化における時間性とは、始まりも終わりもないサイクル的な時間であって、持続性によって規定されている。仏教思想は自我への執着から解放されることで世界と同一化することを説く。自我への執着を滅することで自然や世界の持続的な流れと一体化することが無や空の概念の意味するところであり、この世界との一体化において人は万物に対するcompassionを経験する。アレン・ギンズバーグやゲーリー・スナイダーのようなアメリカの詩人たちは、自然と人間の関係の持続性を損なうユダヤ・キリスト教文化が内包する人間中心主義へのアンチテーゼとして、仏教思想を見出している。このように、第二次大戦後のビートニクスからヒッピー的なカウンター・カルチャーへの流れは、持続可能性というキーワードで読み解くことができる。

2) ユートピア・ディストピア

持続可能性はしばしば永続性として理解されるため、時間を越え、変化しないものとして表象される。その一例が、つねに変化しつつもサイクル的な時間の中で途絶えることなく持続する自然であることをすでに見た。しかしながら、持続可能性は人間の世界にあてはめて思考される時には時間に関わる概念ともなる。そして人間社会における持続可能なものを思考するため

には、いま・こことは違う場所を想像する能力が必要とされる。実際に、文学はいま・こことは違う場所をユートピアあるいはその反転像としてのディストピアとして表象してきた。

まずユートピアについて見てみよう。例えばウィリアム・モリスが「ユートピアだより」で描いた理想郷では、人びとは機械の導入によって労働から解放され、余った時間を芸術活動などにあてている。モリスはアーツ・アンド・クラフツと呼ばれる運動を提唱したが、彼のデザインしたテキスタイル織物などに見られるように、機械によって製作される品物は植物などの自然を模した色や形の柄が付され、美しく装飾される。これらの工芸品は、神の意に沿い、人間の生の本来の目的を実現する形で、テクノロジーが人間と自然の協和的関係という果実を生み出すことができる例となる。モリスがそのテキストの中で描きだしたユートピアは、人間の意志の力が作り出す、自然と人間の持続可能な関係を、想像力を通して具現化したものである。

他方のディストピアの文学の範疇におさめられるものとしては、科学技術の発展と中央集権的な統治システムの発達によって、政府による人民への支配がその精神生活に及ぶ近未来社会を描くオーウェルの『1984』などのSF作品が挙げられる。人類の文明は不断になされる創意工夫によってより良いものになってゆくという進歩史観は、時間は直線状に終わり＝目的に向かって流れるという、キリスト教文化圏の時間観の派生物である。この進歩が行き着く先は、楽観的に見れば人間が理想とする諸状態の実現である。そして文学的想像力は、この理想状態をユートピアとして描くことができる。しかしながら人間社会の現実を端的に見つめれば、文明の進歩が必ず明るい未来へ通じると信じるのが難しいことは明らかである。現在の文明がはらむ問題や脅威が時間とともにその深刻さを増し、人間の精神や生活を不自由なものとしてゆく状態を文学的想像力が描きだせば、それはディストピアの表象を生み出すことになる。この時描かれるディストピアは、古典的SFの場合であれば、意志を持ったコンピューターが人間を徹底的に管理し、拘束する世界であったりもする。概してそこでは、人間が自らの生み出したテクノロジーによって自由を奪われる状況が描かれる。

ここまでを要約すれば、文学的想像力が人間社会を対象にして持続可能なものを表象する時、文明が持続的に発展し、人類にとって幸福な状態が生み出されることを思い描けば、それはユートピア的な表象を生み出す。その反対に、漸進的に退化してゆく文明を想像力が思い描けば、ディストピア表象が形成される。前者は19世紀の空想的社会主義など一部の例を除けば、文学テキストにおいては少数で、例外的なものであろう。後者は先にSFの例を挙げたが、ハリウッド映画や漫画など大衆文化においても非常に広範に見られるイメージである。現代文明が行き着いた先を荒地のイメージでとらえたT・S・エリオットの延長上に、ハリウッド映画で言えば『マッド・マックス』シリーズ、日本の漫画で言えば『AKIRA』など、核戦争による破壊の後に生じた、ポスト終末の世界を描くポップカルチャーがある。これらはいずれも、直線的に進行する時間が終わりに至り、時間＝進歩が停滞した世界を描くものであろう。

V　まとめ

ここまでの議論を図式化すれば、キリスト教の影響を受けた西洋文化においては、不変・永続するものは神であり、一方人間の歴史とは終わりに向かって不可逆的に進むものであって、究極的には持続不可能なものである。現実世界においてこの持続するものとしての神は、唯一自然においてその表現を見出される。

図1

神＝自然		人間社会
持続可能なもの	⇔	持続不可能なもの

しかしながら、文学的な想像力は、いま・ここ、ではない時空に、静的な均衡状態にある（変化をとめた）人間社会を仮構することができる。人類の進歩が、人間にとって望ましい状態にまで到達することが夢想されれば、それはユートピアの表象を生み出す。その逆に、人類の歴史

が持続的に退化し、人間が自らの生み出したテクノロジーによって破滅にいたる姿を描けば、ディストピアの表象が生まれる。

図2 人間社会に転位された持続可能性

持続的な進化	持続的な退化	神＝自然
ユートピア	⇔ ディストピア	持続可能なもの
内		外

このように見てみると、文学的想像力は、持続可能なものをつねに現在の人間社会の外部にあるものと位置づけ、それを想像力によって仮構しようと努めてきたように思える。このことは、今現在の社会において持続可能性を達成しようとするサステナビリティ学の一分野として文学研究がその地位を占めようと努める時に、本質的な困難をもたらさないだろうか？昨今の教育や研究は、具体的な到達目標を掲げ、成果や目標達成度の観点から評価されるようになりつつある。サステナビリティ学というものがありうるとして、この学問研究の成果をはかる指標が持続可能な社会の構築への貢献だとすれば、文学作品の持つ、持続可能性を現実を越えたものとしてとらえようとするこの傾向は、本質的に反サステナビリティ学的とも見なされうる。つまり、現実社会の中に持続可能性を達成するための努力を行わない学問領域は、サステナビリティ学と呼ばれる学問的トレンドからは遠く隔たることに必然的になるであろうから。昨今、文学を社会的有用性の観点から不要視するような風潮がある。そして持続可能性という観点から文学を見る場合、本論考の述べるところがもし正しいとするならば、このこともゆえなしとはできない面がある。文学的想像力は、少なくとも明示された表象のレベルでは、人間社会や世界において永続的（持続可能）なものは存在しない、という暗黙の結論を示唆する場合が往々にしてある。このことから、文学研究・教育をサステナビリティ学に組み込むためには、ひねりや工夫が必要であることが明確になった。

すでに述べたことを再確認すると、もしも文学研究・教育が、それ固有の仕方で、持続可能な発展という目標に貢献することができるとするならば、それは人間が持続可能性という概念と歴史的にどのように向き合ってきたのか、文学テキストを通して検証することによってである。その意味でも、持続可能なものの観点から、われわれの生をめぐる文学的想像力のありようを探るプロジェクトが必要だ。そして、われわれが持続可能なものをこれまでどのように思考してきたのか明らかにすることで、文学は持続可能な社会の構築に何らかの寄与をすることができるかも知れない。そのささやかな端緒として、前節ではいくつかの文学的モチーフの検討を行った。

本論で考察したように、ある種の文学的想像力が、世界は持続しない、という世界観を暗黙のうちにもっているとするなら、サステナビリティ学への文学の組み込みは本質的な困難を有していることになる。しかしながら本論で考察した範囲において示唆された、サステナビリティ学としての文学の肯定的な面についても述べるなら、持続可能性の観点からの文学作品の検証は、学際性を兼ね備えたものとなる可能性を持っていることが強みだ。まず、キリスト教的な世界観が持続可能なものを人間社会の埒外に置いてきたとする私の考えが正しければ、西洋の文学における持続可能性の検証は、超越性を考察対象とする宗教学の領域にも関わってくる可能性がある。持続可能な社会の問題を考察対象とする研究のうち、例えば人類学者・民族学者は前工業文明的社会を持続可能な社会のモデルとする場合がある。ネイティブ・アメリカンの思想に持続可能な社会構築のヒントを求める研究もたくさんあるが、これら持続可能なライフスタイルをもつ前工業文明的社会において、神などの超越的領域が社会の中で非常に重要な役割を果たしていることは論をまたない。サステナビリティ学の中で自然科学や社会科学が考察の対象としにくい超越性の領域の研究は、文学や哲学的研究の守備範囲となるだろう。また神を自然と同一視する、例えばエマソンのトランセンデンタリズムや、さかのぼればエックハルトの否定神学的思考などの西洋的思考が、その延長上に自然と人間の協和的な関係を重視する禅仏教や道教などの東洋思想と共鳴しあったこと

にも見られるように、英米文学における持続可能性表象の検証は、ひいては日本人である私たちの思想や課題ともクロスオーバーするはずである。文学・哲学的研究のもつグローバリズムは、サステナビリティ学へのそれ独自の貢献を可能としうるはずなのである。

そして最後にもう一度確認したいが、文学における持続可能性の表象を検証するプロジェクトは、教育への応用可能性をもっている。現在国連がすすめている持続発展教育推進事業においては、持続可能な社会の構築を担う将来世代の育成のため、さまざまなカリキュラムや教授法、教材の提案がなされている。さまざまな地域や時代の文学者がとらえた持続可能性の表象を学習者に提示し、議論の素材とすることは、この持続発展教育の趣旨に合致する。そして本論が提示したプロジェクトもまた、持続発展教育のための文学研究へと応用されうるものである。

英米文学を持続可能性の観点から検証するプロジェクトは、例えば次のようなテーマを含むだろう。以下に列挙することで本研究ノートを締めくくりたい。

神の表象，自然との関係，ユートピア・ディストピア，東洋思想・仏教思想との関係，終末論的ヴィジョン，テクノロジー，戦争

注

1) 原・梅田編参照
2) 本田由紀は『教育の職業的意義』で、大衆化時代の高等教育機関においてより職業的関連性の高い教育の提供が求められると述べている。しかしながらあまりにも早いうちから細分化した教育プログラムに個々の学生を従属させてしまうことの弊害があり、職業的関連性の高い教育内容を目指しつつも、その後にある程度自由な形で学生たちが自分のキャリアパスや将来の進路について選択できるよう、「柔軟な専門性（flexspeciality）」の確立が必要だと述べている。
3) 本論ではここまで持続可能な社会、ひいては持続可能な人間社会と自然との関係の構築を目指す学問領域をサステナビリティ・サイエンスの語で指示してきた。しかしながら人文学をも包括した呼称としてはサイエンスの語が混乱を生じさせる恐れがあるため、ここからはサステナビリティ学と言い換える。
4) 川崎は経済開発、資源利用、環境保護などに関わる国際会議において、利害の異なる先進国と途上国を同じ議論のテーブルにつかせるための方策として、持続可能な発展の概念が登場してきた経緯を説明している。ある程度社会インフラが整い、生活の質向上のために環境を重視する先進国と、さらなる開発の必要性を主張する途上国の利害調停の結果、この概念は広く流通するようになる。
5) 大規模農業における化学物質使用の害を説いた『沈黙の春』は1962年に出版され、DDTの使用禁止につながる社会運動を引き起こした。この作品はのちにネイチャーライティングや環境文学という呼称されるジャンルの嚆矢と認められるようになった。
6) Tonkinson, Carole. Ed. *Big Sky Mind*、または参考文献にあげた拙論を参照されたい。

Works Cited and Consulted

洋書

Barnhill, David L. "An Interwoven World: Gary Snyder's Cultural Ecosystem." *Worldviews* 6.2 (2002): 111-44. Print.

Bate, Jonathan. "From 'Red' to 'Green'." *The Green Studies Reader: From Romanticism to Ecocriticism*. Ed. Laurence Coupe. London: Routledge, 2000. 167-72. Print.

Blomme, Mark E. "MR Classics Revisited." *Military Review* 89.2 (2009): 128-29. EBSCO. Web. 10 Jan. 2013.

Brunn, Ole, and Arne Kalland. "Images of Nature: An Introduction to the Study of Man-Environment Relations in Asia." *Asian Perceptions on Nature: A Critical Approach*. Eds. Brunn, Ole and Arne Kalland. Richmond, Surrey: Curzon Press, 1996. 1-24. Print.

Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism*. Malden: Wiley-Blackwell, 2005. Print.

Callon, Kathryn. "Road Trip! A Literary Journey Across America." *Library Journal* 136.3 (2011), 139-39. EBSCO. Web. 18 Feb. 2013.

Campbell, SueEllen. "The Land and Language of Desire: Where Deep Ecology and Post-Structuralism Meet." *Western American Literature* 24.3 (1989): 199-211. Print.

Carson, Rachel. *Silent Spring,* 40th anniversary ed. Boston: Houghton Mifflin, 2002. Print.

Chase, Steve. "Changing the Nature of Environmental Studies: Teaching Environmental Justice to 'Mainstream' Students." *The Environmental*

Justice Reader: Politics, Poetics, and Pedagogy. Eds. Joni Adamson, Mei Mei Evans and Rachel Stein. Tucson: U of Arizona P, 2002. 350-67. Print.

Dogen. *Dogen's Shobogenzo* Book 1. Trans. Nishijima, Gudo and Cross, Chodo. Windbell Publications, 1994. Print.

Edwards, Chris. "Motorcycle Maintenance Without the Zen." *Skeptic* 16.1 (2010): 36-39. EBSCO. Web. 21 Feb. 2012.

Fields, Rick. *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*. Boston: Shambhala Publications, 1992. Print.

Freeman, Franklin. "Wheelin' Grace." *Touchstone: A Journal of Mere Christianity* 19.7 (2006): 14-6. Print.

Gerrard, Greg. *Ecocriticism*. London: Routledge, 2004. Print.

Gevorgyan, Suren and Anahit Adanalyan. "A Comparison of Ecological Education and Sustainable Development Education." *Addressing Global Environmental Security through Innovative Educational Curricula*. Eds. Susan Allen-Gil, Lia Stelljes and Olena Borysova. Dordrecht: Springer, 2008. 57-61. Print.

Ishida, Hoyu. "The Seventh Step in This World of Duhkha: To Be in the World but Not of the World." *Asian Humanities* 24.2 (2007): 151-62. Print.

----. "Shinjin and Satori in the Here and Now—Flowers Yet Fall As People Lament." *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education* 6.6 (2001): 43-67. EBSCO. Web. 15 Nov. 2012.

Johnson, Kent, and Craig Paulenich. Eds. *Beneath a Single Moon: Buddhism in Contemporary American Poetry*. Boston: Shambhala Publications, 1991. Print.

Kerouac, Jack. *The Dharma Bums*. London: Penguin Books, 2000. Print.

Lacky, Kris. *Road Frames: The American Highway Narrative*. Lincoln: U of Nebraska P, 1997. Print.

Mao, Nathan. "The Influence of Zen Buddhism on Gary Snyder." *Tamkang Review: A Journal Mainly Devoted to Comparative Studies between Chinese and Foreign Literatures* 5.2 (1974): 125-33. Print.

Matsuoka Shinya. "Anti-capitalist Ideas of Emptiness and Compassion: Gary Snyder and Buddhism." *Journal of Hokkaido University of Education: Humanities and Social Sciences*. 61. 1 (2010): 25-37. Print.

Murphy, Patrick D. *Ecocritical Explorations in Literary and Cultural Studies: Fences, Boundaries, and Fields*. Lanham: Lexington Books, 2009. Print.

Pirsig, Robert M. *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance: An Inquiry into Values*. New York: Harpertorch, 2006. Print.

Rodino, Richard H. "Irony and Earnestness in Robert Pirsig's *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance*." *Critique* 22.1 (1980):21-31. EBSCO. Web. 1 Oct. 2006.

Russell, Jeff W. "Mother Gaia: A Glimpse into the Buddhist Aesthetic of Gary Snyder." *Japan Studies Review* 9 (2005): 123-34. Print.

Snyder, Gary. *Earth House Hold: Technical Notes & Queries to Fellow Dharma Revolutionaries*. New York: New Directions Publishing, 1969. Print.

----. *The Practice of the Wild: Essays*. Washington, D.C.: Shoemaker & Hoard, 2004. Print.

----. *The Real Work: Interviews and Talks, 1964-1979*. Ed. Wm. Scott McLean. New York: New Directions, 1980. Print.

Sponsel, Leslie E., and Poranee Natadecha-Sponsel. "The Potential Contribution of Buddhism in Developing an Environmental Ethic for the Conservation of Biodiversity." *Ethics, Religion and Biodiversity: Relations between Conservation and Cultural Values*. Ed. Lawrence S. Hamilton with Helen F. Takeuchi. Cambridge: White Horse, 1993. 75-97. Print.

Suzuki Daisetsu. *Essays in Zen Buddhism* (third series). Ed. Christmas Humphreys. London: Rider, 1970. Print.

----. *Shin Buddhism*. New York: Harper and Row, 1970. Print.

Tonkinson, Carole. Ed. *Big Sky Mind: Buddhism and the Beat Generation*. New York: Riverhead Books, 1995. Print.

UNESCO. United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) : International Implementation Scheme. Annex Ⅱ. Paris: UNESCO, 2005. Web. 15 Nov. 2010.

Wang, I-chun. "Landscape, Migration, and Identity-Construction: Spiritual Quest via the Zen Path in Jack Kerouac's *The Dharma Bums* and *On the Road*." *Tamkang Review* 37.4 (2007): 1-24. Print.

Whalen-Bridge, John. "Gary Snyder, Dogen, and "The Canyon Wren"." *A Journal for Critical Debate* 8.1 (1999): 112-26. Print.

和書

生方秀紀他編『ESD をつくる——地域でひらく未来への教育』ミネルヴァ書房、2010.

川崎惣一「ESD において賭けられているもの」『ESD・環境教育研究』11 (1), 北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター, 2009. 13-22.

----「アメリカ環境思想におけるウィルダネスの観念」『ESD・環境教育研究』12 (1), 北海道教育大学釧

路校 ESD 推進センター，2010. 7-16.
柄谷行人『隠喩としての建築』講談社，1983.
瀬名波栄潤「LSD (Literary Sustainable Development): 持続可能な発展のための英文学研究」日本英文学会『英文学研究』支部統合号 4 号、2012. 5-28.
原圭史郎，梅田靖編『サステイナビリティ・サイエンスを拓く：環境イノベーションへ向けて』大阪大学出版会，2011.
本田由紀『教育の職業的意義』ちくま新書，2009.
松岡信哉「持続発展教育と現代アメリカ文学」『龍谷政策学論集』第 2 巻第 2 号，2013．(1-12).
----「貧乏白人と奴隷制――ウォレンとフォークナーの南北戦争物語に見る自由の持続可能性――」『龍谷政策学論集』第 2 巻第 1 号，2012a. 13-20.
----「環境問題と文学―持続発展教育の観点から」日本英文学会『英文学研究』支部統合号 4 号，2012b.29-36.
----「『熊』と『朝の狩り』における狩猟――自然・人間関係の持続可能性の表象について」『文学と評論』第三集第七号，2011. 2-11.
----「科学と自然環境の持続性――ゲーリー・スナイダーの作品と思想を通して」『文学とサイエンス』東京：英潮社，2010. 223-236.
----「禅仏教とアメリカ・カウンターカルチャー――ゲーリー・スナイダーの日本体験」中川法城監修，藤谷聖和他編『黒船の行方』龍谷大学，2009, 135-147.
----「Gary Snyder の環太平洋思想と 9・11――詩的認識から生じる非暴力の思想について」*Kwansai Review.* 第 25・26 合併号，2009. 11-20.
オーウェル・ジョージ『1984』吉田健一，龍口直太郎共譯　文藝春秋新社，1950.
バック・パール『大津波』北面ジョーンズ和子他訳　トレヴィル，1988.
----『神の火を制御せよ』小林政子訳　径書房，2007.
モリス・ウィリアム「ユートピアだより」『ラスキン；モリス』中公バックス；世界の名著 52　五島茂責任編集，1979.